

I. (その1) と (その2) は併せてひとつながりの文章を構成する。(その1) は冒頭と末尾を除き本来の順序とは異なる順番でア～カの各ブロックを並べてある。以下の文章を読み、次の問1～問4に答えなさい。

(その1)

**冒頭** 贅沢(ぜいたく)とはいったいなんだろうか？

ア おそらくそうではないだろう。必要なものが十分にあれば、人はたしかに生きてはいける。しかし必要なものが十分あるとは、必要なものが必要な分しかないということでもある。十分とは十二分ではないからだ。

必要なものが必要な分しかない状態は、リスクが極めて大きい状態である。何かのアクシデントで必要な物が損壊してしまえば、すぐに必要のラインを下回ってしまう。だから必要なものが必要な分しかない状態では、あらゆるアクシデントを排して、必死で現状を維持しなければならない。

イ したがってこうなる。必要の限界を超えて支出が行われるときに、人は贅沢を感じる。ならば、人が豊かに生きるためには、贅沢がなければならない。

ウ だが、よく考えてみよう。たしかに贅沢は不必要と関わっており、だからこそそれは非難されることもある。ならば、人は必要なものを必要な分だけもって生きていけばよいのだろうか？ 必要の限界を超えることは非難されるべきことなのだろうか？

エ これは豊かさからはほど遠い状態である。つまり、必要なものが必要な分しかない状態では、人は豊かさを感じるができない。必要を超えた支出があってはじめて人は豊かさを感じられるのだ。

オ とはいえ、これだけでは何かしっくりこないと思う。お金を使いまくったり、ものを捨てまくったりするのはとてもいいことだとは思えない。必要を超えた余分が生活に必要ということは分かるし、それが豊かさの条件だということも分かる。だが、だからといって贅沢を肯定するのはどうなのか？

カ まずはこのように言えるのではないだろうか？ 贅沢は不必要なものに関わっている、と。必要の限界を超えて支出が行われるとき、人は贅沢であると感じる。たとえば豪華な食事がなくても生命は維持できる。その意味で、豪華な食事は贅沢と言われる。装飾をふんだんに用いた衣類がなくても生命は維持できる。だから、これも贅沢である。

贅沢はしばしば非難される。人が「贅沢な暮らし」と言うとき、ほとんどの場合、そこには過度の支出を非難する意味が込められている。必要の限界を超えた支出が無駄だと言われているのである。

**末尾** このような疑問は当然だ。

## (その2)

この疑問に答えるために、ボードリヤール（1929—2007）というフランスの社会学者・哲学者が述べている浪費と消費の区別に注目したいと思う。贅沢が非難されるときには、どうもこの二つがきちんと区別されていないのだ。

(a) 浪費とは何か？ 浪費とは、必要を超えて物を受け取ること、吸収することである。必要のないもの、使い切れないものが浪費の前提である。浪費は必要を超えた支出であるから、贅沢の条件である。そして贅沢は豊かな生活に欠かせない。浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。

人類はこれまで絶えず浪費してきた。どんな社会も豊かさをもとめ、贅沢が許されたときにはそれを享受した。あらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。古代社会の祭り、封建領主の浪費、19世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例があげられるだろう。しかし、人類はつい最近になって、まったく新しいことを始めた。それが消費である。

浪費はどこかでストップする。物の受け取りには限界があるから。しかし消費はそうではない。消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけっして満足をもたらさない。なぜか？ 消費の対象が物ではないからである。人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与された観念や意味を消費するのである。

たとえばグルメブームなるものがあった。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと宣伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかというと、だれかに「あの店に行ったよ」と言うためである。消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。この消費行動において、店は完全に記号になっている。消費されるためには、(b) 物は記号にならない。記号にならないと、物は消費されることができない。記号や観念の受け取りには限界がない。だから、記号や観念を対象とした消費という行動は、けっして終わらない。

消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われている。物が (12) である、と。しかしこれはまったくのまちがいである。現代の消費社会を特徴づけるのは物の (12) ではなく (13) である。消費社会では物がありすぎるのではなく、物がなさすぎるのだ。なぜかと言えば、商品が消費者の必要によってではなく、生産者の事情で (14) されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、(15) に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

そして消費社会は、そのわずかな物を記号に仕立て上げ、消費者が (16) し続けるように仕向ける。消費社会は私たちを (17) ではなくて (16) へと駆り立てる。消費社会としては (17) されては困るのだ。なぜなら (17) は満足をもたらしてしまうからだ。消費社会は私たちが浪費家ではなくて消費者になって、絶えざる観念の消費のゲームを続けることをとめるのである。消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である。

(國分功一郎『暇と退屈の倫理学』、東京：朝日出版社、2011年、第4章に基づいて問題文を作成した。)

問 1. (その 1) のア～カを論理的に見て正しい順番に並べ直したとき、それぞれが第何番目にあたるのか、その数字を解答用紙 A (マークシート) の解答欄  ～  にマークしなさい。

マークシートの解答欄

- ア → 第  番目  
 イ → 第  番目  
 ウ → 第  番目  
 エ → 第  番目  
 オ → 第  番目  
 カ → 第  番目

問 2. 下記のそれぞれの文について、下線部 (a) に示された筆者の考える浪費とみなされる例として、妥当なものには 1 を、妥当でないものには 2 を解答用紙 A (マークシート) の解答欄  ～  にマークしなさい。

- ・ N 氏の月に一回の贅沢は、食べ放題のバイキング方式のレストランで、満腹になるまで食べることだ。
- ・ 車好きの N 氏はモデル・チェンジがあるたびに、新しく車を買って換えている。
- ・ 会社社長の N 氏は避暑地に個人用の別荘を数多く建設したが、そのうちいくつかを使用しないまま荒廃させてしまった。
- ・ ファッション雑誌を愛読する N さんは、街に出るたびについ流行の服や靴を買ってしまう。

問 3. 下線部 (b) について、「記号」という言葉を筆者がどのような意味で用いているのか、説明として最も適切な選択肢を一つ選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄  にマークしなさい。

- 1 物の消費量を経済指標として数値化する際に用いる算式の記号。
- 2 物の一つ一つが固有の歴史をもち、所有する個人にとってかけがえのない印であるということ。
- 3 物のイメージや意味、その魅力などの諸情報。
- 4 物に付与され、需要と供給の交換比率によって決まる価格。

問 4.  ～  にあてはまる最も適切な語句を下の選択肢から選び、その番号を解答用紙 A (マークシート) の解答欄  ～  にそれぞれマークしなさい。各語句は一回しか使えないものとする。

- |      |       |      |      |      |
|------|-------|------|------|------|
| 1 節約 | 2 消費  | 3 浪費 | 4 過剰 | 5 品質 |
| 6 市場 | 7 希少性 | 8 需要 | 9 供給 |      |

## II. 以下の文章を読み、次の問1～問8に答えなさい。

天然資源には、(i)再生 (recycle) 不能な枯渇性資源、(ii)再生可能な枯渇性資源、(iii)人類の活動に左右される更新 (renewal) 可能資源、および(iv)人類の活動とは関係のない更新可能資源がある。(i)の再生不能な枯渇性資源は、利用すると散逸してしまって二度と利用できない。(ii)の再生可能な枯渇性資源は、利用しても元の性質が保持されていて再び使うことができるが、採掘によって資源量は減っていくものをいう。更新可能資源は、自然のもつ力によって資源量が回復するものである。これは人間の活動による環境変化によって資源量が影響されるもの (iii) とそうでないもの (iv) に分類されている。人間の活動の影響を受けない (iv) の更新可能資源以外の資源は、現在の利用が将来世代の利用量に影響を与えることになる。

天然資源の存在量は、地質学的な不確実性と採掘する場合の経済性の二つの観点で分類されている。存在量の確実な順に、確認埋蔵量、予測資源量、未発見資源量の三つに分類される。これらの合計が資源賦存量とよばれ、地球で得られる資源量の上限である。経済的に採掘できる確認埋蔵量を可採埋蔵量という。1年間に採掘された資源の量を年間生産量といい、その年の1月1日(期首)の可採埋蔵量を年間生産量で割ると可採年数が計算できる。

天然資源の市場に起きた問題について検討してみよう。米国・EU・日本は中国によって引き起こされた希土類(レア・アース)市場の混乱について世界貿易機関(WTO)に提訴した<sup>注\*</sup>。希土類は土ではなく17種類の金属で鉱石として産出される。希土類は原子量の大きさによって軽希土類と重希土類に大別される。希土類市場の大きさは全種類合計しても年間200億米ドル程度で、これは鉄鉱石(約3500億米ドル)や銅(約1600億米ドル)に比べるとかなり小さい。そのかわり、グリーン・ハイテク・防衛の三つの産業分野では希土類の「戦略的」利用という点が注目されている。希土類には主に以下のような用途がある。第一にガラス加工における研磨・色付け、第二に石油精製用の触媒や自動車の触媒コンバーターへの利用がある。これらの用途は多くの代替物が利用可能である。第三に代替物のない用途として非常に強く小さい永久磁石への利用がある。ハイテク分野では小さくて軽い永久磁石が、過去20年ほどの電子・通信革命に役立ってきた。たとえば「iMac から iPod, iPhone, iPad へ」という変遷を支えている。グリーン・テクノロジーの領域では、LED 電球、液晶テレビ、風力発電の柱の先端に設置する発電機用の永久磁石、さらにはハイブリッド自動車の蓄電池やモーターにも用いられている。軍事的用途としては、無人偵察機、トマホーク・ミサイル、スマート爆弾などの制御や夜間の視野技術に使われている。希土類の軍事利用の正確な数字をとらえることは難しいが、その需要量は非常に小さい。

このように「戦略的」利用の需要が急増するなかで、米国・EU・日本が中国を訴えたのは、供給側に問題があるからだといわれている。米国地質調査所によると、(a)2010年に中国は世界の希土類の97%、約130000トンを産出し供給したが、国外への供給としては30000トンに輸出量を制限した。その結果、世界最大の希土類輸入国(日本)への供給不足をもたらした。これに対し中国は、資源の枯渇と環境破壊を抑えるために希土類の輸出を制限する権利があると主張している。この理由による輸出制限はWTOの規則には抵触しない。一方、単純な輸出制限はWTOの規則では違反である。

WTOでは希土類の価格動向を市場の歪(ゆが)みの証拠として分析する。世界市場における希土類の価格変動を見ると、2010年から2011年にかけて、最高価格は最低価格のほぼ20000%つまり200倍近くになった。月平均価格では、軽希土類のランタンは3550%、重希土類のジスプロシウムは2950%上昇している。その一方、同じ期間における中国国内の元建ての月平均価格はランタンでは890%、ジスプロシウムでは2120%の

上昇となった。このような価格動向は米国・EU・日本の訴えを支持しているようにみえる。ちなみに、他の鉱物では、最低価格から最高価格の変化でも10年間で120%（銅）から300%（ニッケル）および440%（銀）程度である。

中国の主張に分がある点もある。ランタン（軽希土類）の市場よりもジスプロシウム（重希土類）の市場の方が価格変動の内外格差が小さい。中国の軽希土類は主に内モンゴル産であり、重希土類は中国南部産である。埋蔵量の大半が軽希土類であり、中国や他の国々も軽希土類は不足していない。しかし、重希土類は世界的に不足している。環境への悪影響に関しては、内モンゴルの軽希土類の鉱山では一般の鉱山と同程度である。一方、中国南部の重希土類の鉱山では、酸を丘全体に注ぎ、希土類分を豊富に含む浸出液を収集するといった方法をとるため環境破壊が著しい。また輸出制限は密輸も招いており、資源保護の観点から中国政府は、環境面ばかりではなく社会面でも中国南部の希土類の鉱山を統括・規制しようとしている。これはWTOの規則に沿ったもので、(b)中国が軽希土類では敗訴し、(c)重希土類では勝訴するという結末もありうる。

(Mark Tyer, and John P. Sykes (2013) 'The statistics of the rare earths industry.' *Significance*, vol. 10, issue 2, April 12–16 および Tom Tietenberg, and Lynne Lewis (2012) *Environmental and Natural Resource Economics*, 9<sup>th</sup> ed., Pearson を参考に問題文を作成した。注\*: 2012年に米・EU・日本からWTOに訴えが提出され WT/DS431, 432, 433 として登録されている。)

問1. 以下にあげる資源で文中の下線部 (i) に分類されるものには1, (ii) に分類されるものには2, (iii) に分類されるものには3, (iv) に分類されるものには4を解答用紙A（マークシート）の解答欄  ～  にマークしなさい。

太陽エネルギーは  に分類される。      ガソリンは  に分類される。  
天然ガスは  に分類される。      ペットボトルは  に分類される。  
マグロは  に分類される。      金・銀は  に分類される。

問2. 次の表は、期間が10年ごとの原油の埋蔵量に関するバランス表である。空欄に入る数字を解答用紙A（マークシート）の解答欄    ,    にマークしなさい。

単位：10億バレル	1981–1990年	1991–2000年	2001–2010年
期首（最初の年の1月1日）の可採埋蔵量	649	999	1028
10年間の生産量（＝採掘量）	225	<input type="text" value="(24)"/> <input type="text" value="(25)"/> <input type="text" value="(26)"/>	302
10年間の可採埋蔵量の追加	575	290	<input type="text" value="(27)"/> <input type="text" value="(28)"/> <input type="text" value="(29)"/>
期末（最後の年の12月31日）の可採埋蔵量	999	1028	1472

資料：米国エネルギー情報局の資料をもとに作成。ただし、原油の可採埋蔵量の推定は大変難しいと注記されている。

問3. 原油の2011年の年間生産量を320億バレルとすると前問2の表から算出できる可採年数は  
 (30) (31) 年となる。解答用紙A(マークシート)の解答欄 (30) (31) に数値を  
 マークしなさい。(単位に注意すること。)

問4. 下線部(a)に示された数字をもとに中国が仮に輸出制限をせずに産出量をすべて輸出するとした  
 ら、輸出制限した場合よりも売上高が (32) (33) 億米ドル増えることが推定される。解答  
 用紙A(マークシート)の解答欄 (32) (33) に数字をマークしなさい。ただし、1米ドル  
 を6元とし、輸出価格は、1トンあたり平均15万米ドル、国内価格は1トンあたり平均39万元とする。

問5. 希土類の可採年数は300~400年といわれているので、それほど希少な鉱物ではない。以下に掲げ  
 る状況のうちで、需要側の要因で希土類の価格が上昇する場合には1、需要側の要因で希土類の価  
 格が低下する場合には2、供給側の要因で希土類の価格が上昇する場合には3、供給側の要因で希  
 土類の価格が低下する場合には4を解答用紙A(マークシート)の解答欄 (34) (35) ,  
 (36) (37) (38) にマークしなさい。

(あ) ハイブリッド車の急速な普及 → (34)

(い) 米・豪で希土類の鉱山再開 → (35)

(う) 良質な希土類の鉱床の発見 → (36)

(え) 希土類を節約可能にするハイテク製造技術の確立 → (37)

(お) 中国による希土類の輸出制限の強化 → (38)

問6. 下線部(b)のように中国が軽希土類で敗訴すると筆者が考えた理由を本文の趣旨にしたがって、  
 解答用紙Bの所定の欄に60字以内でまとめなさい。

問7. 下線部(c)のように中国が重希土類で勝訴すると筆者が考えた理由を本文の趣旨にしたがって、  
 解答用紙Bの所定の欄に40字以内でまとめなさい。

問8. 希土類の場合、付加価値が生ずる割合は、採掘段階で50%、金属に加工処理する段階で50%である。  
 金・銀では採掘段階で生じる付加価値の割合が90%と高い。輸出国が希土類鉱石の輸出制限で意図し  
 ていると考えられる効果はなにか、解答用紙Bの所定の欄に45字以内で説明しなさい。ただし「国  
 内」「付加価値」の両方の語句を用い、それぞれの語句に下線を引きなさい。